

2015年1月1日



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第四話

戦後70年で思うこと

元旦特別編

私も今年で70歳を迎えます。終戦直後に生まれ、正に戦後を生きてきた人間です。思うところ、今後の日本の子育て、教育がどうあるべきか、若い世代は何をすべきかについて年頭に述べたいと思います。

明治維新から太平洋戦争

折角ですから明治維新から少し振り返りたいと思います。日本人は近現代史に弱いと言われています。戦後の教育にも起因しますが、日本の現状を理解する上で、明治維新から日本が歩んだ道を振り返る必要があります。

幕末、明治維新では、欧米列強が植民地政策を進めインドや中国等を収奪していく最中、「日本を何とかしなくてはいけない」という強い気概が人々の中にあり、驚異の建国を成し遂げたのです。しかし、日清、日露の戦争に勝利してから、日本人は慢心し、合理的な思考を行えず、再度危機を招き込む土壌を作りました。軍部は慢心し、財閥は利益のみを追求し、政治家・官僚は墮落しました。昭和10年代は社会の格差が広がり、社会の矛盾が広がりました。特に東北地方の人々は冷害、津波災害などもあり、塗炭の苦しみを味わっていました。この状況を何とかしなければいけないと立ち上がったのが2・26事件の青年将校たちです。事件の是非はともかく、兵隊たちは貧しい東北の出身も多く、それを肌で感じた青年将校たちは「何とかしなければいけない」と悩んだのです。大塩平八郎の乱から丁度100年目の事です。大塩平八郎は天保の飢餓の窮状をよそに腐敗した役人や豪奢に暮らす豪商を許せなかった。状況は類似していた。また、現在の日本の状況も類似しています。格差の拡大、東北の難儀、政治家・官僚の腐敗、それに群がる民間人。

余談になりますが、歴史の細部に入ります。当時軍部には二つの流れがありました。国内を改革して難局に対処しようとする「皇道派」と、海外に侵攻し、日本の影響力を巨大化して問題を解決しようとする「統制派」のグループです。「皇道派」が起こした2・26事

件は、当初は蹶起部隊^{けつき}言われ、陸軍上層部に容認されたかのようにありましたが、昭和天皇の逆鱗に触れ、反乱軍となり、皇道派は殲滅しました。その後、軍部は「統制派」の独壇場となり、大陸侵攻が加速化して、太平洋戦争に向かって歴史の舵が切られるのです。太平洋戦争はどの様な観点から見ても無謀な誇大妄想でした。日露戦争によって加速した「精神力」で「論理的な判断」を埋め合わせる思考パターンが、合理的で正しい選択を阻害しました。当時の軍人は「軍事勅諭」以外本を読まなかったとも言われ、天皇の弟君、秩父の宮も「教養のない軍人は判断を誤るのではないか」と危惧されていたと言われていいます。秩父の宮の信任が軍の中で最も厚かったと言われる安藤輝三大尉（後に2. 26事件の首謀者となる）は永田鉄山軍務局長（統制派の頭目 後に5, 15事件で倒れる）と掛け合い、陸軍から膨大な予算を預かり、各界から講師を招聘し、将校の教養を高めるための講演会を開催していたと言われていいます。安藤輝三の父は福澤諭吉の『学問のすゝめ』に触発され、岐阜から徒歩で上京し、苦学して英学を学び、やがて慶應大学予科の教授になった人で、家には『学問のすゝめ』の冒頭部分が記載された額が掛っており、兄弟たちは学問・教養の大切さを常に伝えられていたということです。筆者は大学卒業時、共産圏貿易の先鞭をつけた論客、小松製作所の事実上の創立者である河合良成に憧れて小松製作所に入社しましたが、後日、縁があり河合翁の病床に呼ばれてサイン入りの自叙伝を頂戴することとなりました。河合翁はその後もなく亡くなりましたが、その伝記の中に、河合良成も安藤大尉から依頼され、講演者として将校の前で話した旨の記載がありました。

さあ、話を本筋に戻しましょう。1868（明治元年）に布告された五箇条の御誓文には「旧来の陋習^{ろうしゅう}を破り」「智識を世界に求め」など、近代国家に歩みだすことを目標としていましたが、10年もしないうちに復古的な揺り戻しが始まります。それを象徴するのが「明治十四年の政変」でした。大隈重信と福澤諭吉たちは、英国流の議員内閣制（「君臨すれども統治せず」）、民主的な国の運営を目指しました。一方、伊藤博文や井上毅は利権問題も絡み薩摩グループと組み、薩摩長州の寡頭政治を目指しました。政変の結果、大隈重信は辞職し、三田系官僚は大勢追放されます。この当時のことを福澤諭吉は『福翁自伝』の中で次の様に述べています。「従前の教育法を改めていわゆる儒教主義を復活せしめ、（略）人を捕えて牢に入れたり東京の外に遂に追い出したり、マダそれでも足らずに、役人たちはむかしの大名公卿のまねをして華族になって、これみよがしにから威張りをやっている」。天皇は信仰の対象となり、儒教教育主義が復活し、「教育勅諭」が發布され、また、軍人に対して「軍人勅諭」が下賜された。国民が自ら、合理的に、主体的に考える教育機会は失われてしまいました。これらの教育は、「バンザイを叫んで命を捧げる国民」を育てるのには好都合でしたが、合理的思考、戦略的思考、正しい歴史感を持ち、国民を正しい方向にリードしていく人材の育成が出来ませんでした。もし「明治十四年の政変」が起らず、国家が当初の予定通りに民主的な体制で運営されていたならば、日本という国の針路は大きく変わっていたでしょう。結局、多大な犠牲を払った太平洋戦争を経て、昭和二十年の新しい再スタートとなりました。ようやく、民主主義とか自由とか平等とかの価値観の上に立つことが出来る様になったのです。

戦後から絶頂の四半世紀

終戦時に軽井沢に疎開されていた皇太子（現天皇 当時 12 歳ごろか）が東京に戻られたとき、焼け野原を見て慄然としたことでしょう。瓦礫がれきの中で、この国を何とか建て直そうと、国民は必死に働きました。そして、驚異の経済成長を迎えました。明治維新の建国の時と同じプロセスでした。その中心は戦前戦中に教育を受け、戦争を体験してきた人達です。日本は再び、驚異の復興を成し遂げました。

バブルな日本経済

1980 年代後半から 1990 年代初頭をバブル期といいます。土地の高騰がスペキュレーションを産み、さらに高騰するという、実態を伴わない経済の膨張がありました。まるで、ブリキのおもちゃが、「将来値段が上がる」という思惑で値段が上がるようなものです。当時は銀行もどきどきお金を貸す、知らない間に貸付金を銀行口座に振り込んでいる、狂気の時代でした。米国留学時代の仲間も、当時何かのときに集まると、「バブルは何時かはじける」と言っていました。

やがてバブルははじけます。バブルは世界的に見て、繰り返しはじけています。これは一つの法則です。国民に実質的な消費購買力がないのにバブルによる過剰投資がある。そこに過度の金融引き締め政策が取られる。1920 年代の株価大暴落と世界恐慌の始まりもこのパターンでした。当時の橋本蔵相は金融引き締め政策を取り、宰相になって更に引き締めました。医者で言うならば、高血糖の人に投薬し、効果にタイムラグがあることを失念し、更に大量にインシュリン注射をして、やがて効き過ぎて、低血糖で死んでしまう様なことです。

落日の四半世紀

筆者は慶応大学在学の時加藤寛教授のゼミを取り、ゼミの代表をしていた関係から、打ち合わせなどで先生と顔を合わせる機会が多くありました。先生は現代の福澤諭吉とも評せられ、歴代首相の経済ブレーンでもありました。慶応大学湘南藤沢キャンパス（SFC）開設に尽力し、初代慶応大学総合政策学部長に就任、第二臨調では国鉄、電電、専売公社の民営化などに辣腕を振るいました。卒業してから暫く立った或る日、私は用事があり、先生の研究室を訪れました。打ち合わせの後先生は何かを思い立ったかの様に書庫に行き『福澤諭吉の精神（日本人）』（1997 年 加藤寛 著）を取り出してサインをして私に贈呈してくれました。その中で先生はこう言われています。「いま、日本は病んでいる。この数年に起こった数々の出来事、たとえば住専問題や HIV 訴訟問題などは、日本の病気の兆候にほかならない。（中略）中央官庁も地方自治体も一緒になった権力の乱用は後を絶たない。官官接待・カラ出張に使われる食糧費の不正支出。陳情合戦。そこに群がる民間業界。（中略）第二次大戦の敗戦を味わいながらも繁栄をつづけ、日本経済の成功に酔った日本人の、

惰性の行き着いた姿にすぎない。まさに、病膏盲こうこうと言うべし」。

第二次大戦の時も財閥、軍閥、政治家、官僚などの腐敗・墮落と、教育の不全が国を困難に陥れましたが、戦後の、(世界でも注目されている)この日本の長期停滞・閉塞状況も同じ様な状況から生み出されたものです。歴史は繰り返す。日本の20年に渡る長い停滞は加藤先生が警鐘を鳴らした頃から始まりました。

戦後の子育て・教育の問題点

しかし、明治維新、戦後の危機的状と現在の危機的状況とで大きく異なることがあります。改革を担う主体者である日本人の質的变化です。長期停滞は経済だけでなく、人間教育も停滞、劣化しているのです。改革の主体者である人材の教育が劣化しているとなれば、事態は深刻です。

アイデンティティの喪失

- 平和憲法が制定され、民主的な教育がされたことは非常に良いことでしたが、戦後の教育は日本人のアイデンティティを失うことから始まりました。占領政策により、修身(道徳)、地理、歴史の教育は禁じられました。日本を二度と強力な国家にしない占領政策であったと思われます。これらが復活したのは相当経ってからです。民族のアイデンティティは、継続の上に醸成されて育つものです。河合良成翁の自叙伝からの記述を借りると、「民族の向上発展ということは、時代に時代を積みかさね、その沈殿部分をわがものにして、太い骨格ができあがっていくものである」。バックボーンを持たない戦後生まれの日本人は、**抛りどころなく彷徨**します。その結果、利己主義、快樂主義、拝金主義が跋扈する土壌が出来上がる。このことが、ひ弱で脆弱な日本を造り出す土壌となるのです。若い子育て世代は、自分達が大切にしている価値観とは何か、生活信条は何なのか、親から伝えられ、子どもにも伝えたいものは何か、などを夫婦で話し合い、確認することが子育てのスタートなのです。戦後の断絶の後、日本と言う社会は、暗黙の了解である、「基盤となる価値観・文化」などを子育て世代に伝えてくれないのです。自分達で心の奥に問い合わせて、明確にして子どもにも伝えていかななくてはならないのです。

実際私立幼小の受験では、両親面接で、「あなたの大切な価値観とは何ですか」、「生活信条を教えてください」、「大切にしているものは何ですか」、「親から伝えられて、子どもにも伝えたいことは何ですか」などと、**親の「生き方」が問われる**ことが多いのです。幼稚園受験では、両親の比重が大きいと心得てください。

社会環境・子育て環境の変化

- また、高度成長に伴い、地方から都会に移動した若い人達が核家族となり、人との関わりが薄い社会状況が生まれました。その中で育った若者は、人との関わりが上手でなく、その若い人達に育てられた子どもも社会性が育ってないという悪循環が始まり

ました。子育てをする上で、現代の親は「不足している子育て環境、特に人との関わり合いを育む環境」の大切さを良く認識し、幼いうちから子どもの社会性を育む努力をしなければならないのです。社会性こそ、「人生成功」の最も相関値の高い要件であるにも関わらず、知育のみに目が行くのです。その中には、根拠のない早期教育も多いのです。

- 乳幼児期の「基本的信頼関係」（愛着形成）の形成が希薄になった影響で、若い人の社会的不適応が急増していることは第一話から三話に述べましたが、様々な要因が重なってその様な現象が生じました。それらの若い人はやがて同じ不適応を抱えながら老齢化します。必ず、国を衰退させていきます。

間違いだらけの乳幼児教育

- **IQ 神話の間違い**

IQ を高めることを標榜している幼児教室も多いですが、IQ で表されるものと有能であることとの相関値は低いのです。それでは、IQ とはどのようなものか振り返ってみましょう。1917年、第一次世界大戦の最中、アメリカ陸軍は心理学者ロバート・ヤーキーズの協力を得て知能検査（IQテスト）を開発し、陸軍の三百万人近い新兵を対象に検査を行いました。しかし、知能検査では高級士官になるべきと分類された新兵の多くが、実際には軍人としては無能であることがわかったり、その反対に知能検査では惨憺たる結果を出し、低い階級にとどめておくべきと分類された新兵が有能な軍人となったことが判明したりして、ほどなく陸軍は検査を取りやめました。日本の小学校受験においてもIQ値を参考にした時期がありました。しかし、IQ値はトレーニングにより高めることが出来るものの、入学後の子どもの学力とほとんど相関がないことが判明し、今は採用されていません。

日本では、IQ神話が独り歩きし、親はその虚像を追っているのです。

- **左脳右脳教育の間違い**

脳画像研究の進歩により、脳の部分ごとの機能が明らかになってきました。その結果、巷ではやっている、右脳-左脳論、まして、それに基づいた特殊な幼児教育、教材も根拠の拠りどころを失っています。最新の出版物の中から記述を抜粋しましょう。

「研究者なら何十年も前から知っているとおおり、科学者は（中略）右脳-左脳論の大衆文化バージョンが脳の実際の機能の仕方を捉えていないという動かしがたい証拠を持っていた。（中略）例えば右半球は知覚的・直観的・情動的で左半球は言語的・分析的・論理的であるというように、両半球が単純で過剰な二分法の観点から分類されている。（中略）だが、脳は断じてそんなふうに機能しない。（中略）一例を挙げよう。言語を完全に理解するにはシンタックス（文の構造、これは左半球の特異な分野）と声の調子の変化の持つ意味（これは右半球が得意な分野）と意味の解釈法（これは両半球が協同して行う）を理解する必要がある。一方が『論理的』でもう一方が『直観的』なわけでもなければ、片方が『分析的』で、もう片方がより『創造的』なわけでも

もない。言い換えると、二つの半球は単一のシステムの一部なのだ。(中略) 脳は単一の素晴らしく複雑で、徹底的に統合されたシステムなのだ」、『上脳 下脳』スティーヴン・M・コスリン G・ウエイン・ミラー 2014年10月30日出版)。科学の文献では大衆文化ともいえる従来の二分法に関する警告は数多くみられます。

- **パターン教育の限界**

計算力などの定着には所定の効果があるものの、思考力、想像力、何かをやり遂げる力の育成などの面では効果は薄く、また、成功への条件である、「気質」を伸ばすことになると相関はしなくなります。

- **発達段階を踏まえない乳幼児教育**

音声に関する能力は、人生の早い時期に能力が固定されてしまいます。音感であるとか音声を聞き分け再生する能力とかは無限の可能性を持ち生まれますが、やがて能力は固定されてくるので、早期教育が望ましいかもしれません。(日本人がこの段階で英語を乳幼児に教えることは厳禁です。残念ながら音が違うのです。)

ただし、発達段階を無視した特殊な知能教育は疑問です。また、幼児教室の場合、経験の浅い指導者が、マニュアルで一律に指導するのも、個人差を無視することになり、最適な対応が出来ないこととなります。幼児期の個人差は大きいのです。

これからの日本の乳幼児教育・保育はどの様にあるべきか

今回のコラム「元旦特別編」は今までに日本の歩みを振り返ると同時に、これからの様な子育て・教育をすべきかの骨子を述べていきたいと思います。「0歳からの教育 コラム」は全編この骨子の上に成り立っています。個々のコラムを理解するために、全体を俯瞰することが必要です。

1. 子育て・教育をするということは、「どの様な人間に育てるか」という、羅針盤を親が持つ必要があります。どの様な価値観を持ち、文化を共有し、アイデンティティを持ち、生活信条を持った人間を目指すか。肉体に精神を吹き込まなくてはなりません。前述した通り、戦後、日本人が持っていたアイデンティティが崩壊した後、新しい望ましい日本人の生き方モデルが明確に醸成されず、戦後日本人は、利己主義、金権主義、快樂主義の中に彷徨します。それが、官僚の「省益優先」・「権力乱用」、政治家の「党利党略」、各個人の利己主義などの色彩を色濃くしました。しかし長期の日本の停滞、東北の惨状が起点となり、日本人の意識に変化が表れています。

平和憲法が制定され、共生の価値に目覚め、エコロジーの必要性に迫られ、今や、各家族は、**自分達の大切にすることを再確認**し、明確にして、子育てをしなくてはなりません。私立の学校は、学力を与えるだけでなく、「人間としての教育」を目指しています。従って学校の教育方針に合致している家庭を選びます。それが、「**幼小受験とは各家庭の『生き方』を診る考査である**」と言われる所以です。自分達の生き甲斐とは何か、子どもが生き甲斐を持ち、充実した人生を歩むには

どの様な子育てをしたら良いのかを明確にしなくてはなりません。

2. 子育て・教育は子どもの発達段階に合わせ行うものです。子育ては胎内で命を授かったときから始まり、母親の体液中のホルモン（コルチゾール等）を通して子どもに影響を与えます。胎内の子どもは、母親の音声を聞いたり、食べたものの香りを味わったり、無意識の中で、生まれてきてからの準備をしています。妊娠してから生後6~8週間までを母子共生期と言います。母と子にとって特別に大切な時期です。この時期の抱く、触れる、授乳と言うスキンシップは、愛着形成にとって極めて大切です。**乳児期、0歳から2歳までに大切なことは（母と子の）「基本的信頼関係」の確立です。**この観点が戦後の子育てに欠けているのです。

母親は子どもが会える最初の人間で、人間社会への扉です。社会に対する信頼観、自分の能力に対する有能観もこの時期に育まれます。これが、生涯にわたる、人格の基盤になります。無償の愛とインタラクティブ（相互方向的）な関わりが基本です。手を抜いてはいけません。この時期の母（又はそれに代わる祖母等）と子どもとの**関わり**の**稀薄性**が、現代の若者が社会とかかわる能力の低さの原因になっています。発達段階と発達課題については、第三話でエリクソンのライフサイクルモデルを紹介しました。後日、また角度を変えて紹介致します。

3. 幼児期（2歳~4歳）、児童期（4歳~7歳）になってくると、先頭連合野が発達してきます。知能指数を伸ばすという観点より、**脳の実行機能を強める教育**が大切です。前頭連合野にあるワーキングメモリーは情報を集め問題解決をするための機能を受け持った部分です。ワーキングメモリーは外部の状況を把握するとともに、海馬より記憶を呼びだし、思考し、問題解決の指示を行います。その時、前頭前野の他の機能の意見も参考にします。前帯状回皮質は心の理論、共感を司る機能と言われ、他者の痛みや共感に関わる機能です。前頭眼窩皮質は行動規範に関わると言われています。これは規範から照らし合わせて、行って良いのか悪いのかを教えてください。ワーキングメモリーはこれらの諸機能の意見も聞いて初めて、社会的存在である、人間としてのバランスのとれた判断と行動が出来るのです。

これらの三位一体の実行機能は、人が人間となり、社会的成功を収め、仕合せに暮らしていくことに不可欠です。そして、乳児のときから、子どもが自分で自分をコントロールする力を育むことが大切です。それはきつく、怖く、厳しく対応するというものではありません。子どもが能動的に自分自身の主人になり、周りに関わることです。そのプロセスで、集中力、自己コントロール力、自己統合力、問題解決力が育まれるのです。赤ちゃんが泣いて、お母さんが応える、自分の手や足が自由に使える等、始めの一步から実行機能の育成は始まっているのです。

4. 最新のアメリカの研究でも、「子どもの発達に最も重要なのは、最初の数年のうち

心、好奇心、誠実さ、ものごとをやり抜く力、自信などを伸ばすことに手を貸せるかどうかである。(中略) 大切なのは「**非認知的スキル**」であり、知能検査で計れる様な認知的スキルではない」(『成功する子 失敗する子』何がその後の人生を決めるのか ポール・タフ 2013年12月出版) と言っています。

5. 第二話で触れましたが、赤ちゃんや子ども、いや、人には、「**自ら発達しよう**」とする「**命の力**」があります。言い換えるならば、その様なDNAを持って生まれます。周囲の環境に主体的に関わって成長していきますが、その力を引き出し (educate) てあげるのが子育て・教育です。子どもは生まれながらにして、自分を発達させてくれる刺激に関して、「**関わりたい**」という好奇心を持っています(敏感期・感受性期・臨界期)。子どもを良く観察することが大切です。子どもの好奇心、関わりたいというエネルギーを活用する子育てが、「**楽しく、楽な子育て**」です。

しかし、現在の日本の子育て環境は、本来子どもが関わるべき環境(人類進化の過程で、本来は存在している、進化的に期待された環境、**EEE**)が大きく損なわれています。例えば、「他者との関わり」であるとか、子どもが自分の意思力と筋肉をつかって、身の周りの事に自ら関わる機会とかです。生活が便利になり、手先等の筋肉を使って何かを行うことも少なくなってきました。親は環境変化を理解して、子どもに環境と関わる機会を与えてあげなくてはなりません。**ICE** 教室ではこのようなことを、具体的にセミナー等を通してご保護者の方にお伝えします。

6. 脳の画像処理研究の進歩のおかげで多くの事が解明されてきました。しかし、因果関係の解明と、具体的体系的な子育て・教育ノウハウを持っているかという**実践力**とは異なるのです。

事実、脳科学の進歩は、**ICE** 教室が大切にしてきた、モンテッソーリ教育法が正しかったと証明している部分がほとんどです。モンテッソーリ女史の頃には、画像処理の技術はありませんでしたが、数多くの子どもを「**観察**」することによって、教育法を編み出し、体系的な教具・教材を完成させたのです。つまり、実践力を持っているのです。**ICE** 教室では、新しい知見を常にキャッチし、子育て・教育を包括的に研究し、例えば、セラプレイ等の実践力を持った現代のテクノロジーも取り入れながら、発達段階と目的に合った、最適の子育て・教育を提供しています。

以上

次回は、当初の予定通りに「共感」についてお話致します。